# 国際耕種が考える「資源管理」とその「技術開発」<その5>

## イラン・ゲシュム島での観光薬草園設営

ペルシャ湾ホルムズ海峡に浮かぶイラン・ゲシュム島は、ペルシャ湾最大のハラ・マングローブ林や島内の景勝地（ジオサイト）などの自然資源によりユネスコのジオパークに登録されており、400 万人に及ぶ観光客が訪れるイラン国内有数の観光地である。

筆者はそこで JICA が実施した地域開発マスタープラン策定において、自然環境の保全を重視した「エコ・アイランド構想」による、エスノボタニカルな視座（文化・伝統的背景）から観光資源としての植物資源活用、および島内環境保全の担い手である地域住民の生計維持・向上に寄与する観光薬草園の設立・運営に係るパイロットプロジェクトを実施した。本稿ではその概要を紹介する。

建設中の観光薬草園エントランス

イランにおいて、所謂“生薬”としての植物資源の活用は、ユナニ（ギリシャ・アラビア）医学に始まる歴史と伝統がある。現代におけるその扱いも、日本の漢方におけるそれとほぼ同じものであると筆者は感じていた。島内にも生薬製剤の販売店が多数在り、ミスワク（*Salvadora persica*, 英名 Toothbrush tree）の抗菌作用を持つ成分を配合した、イラン国内製造の練り歯磨き粉などがスーパーマーケットで購入できた。

パイロット事業は、島内 57 カ村からオープン型事業形成アプローチにより選出された Karvazin 村協同組合に対して、展示型薬草園を中心とした簡易加工設備や倉庫、また簡易宿泊施設や売店を含むビジターセンターを設営した。協同組合メンバーを中心とした生産者グループに対して、点滴灌漑による薬用木草本植物の栽培、収穫後処理と簡易加工品生産の技術支援・訓練を実施した。

展示・作目の選定と栽培・加工技術指導は農業ジハード省（当時）専門家の助言のほか、「ホルモズガン州・民族植物学資源探索報告（Safa.et.al., 2012）」など文献を参考に、地元の生薬栽培篤農家の協力を受けて行われた。

前述のミスワクを含む、キリストノイバラ（*Ziziphus spina-christi*, 英名 Christ's thorn Jujube）やナツメ（*Z. jujube*）、インドセンダン（*Azadirachta indica,* 英名 Neem）など木本類、またシリアンルー（*Peganum harmala*）、フェヌグリーク（*Trigonella foenum-graecum*）、アロエベラ（*Aloe vela*）など草本類、およびディル（*Anethum graveolens*）やミント（*Mentha spp.*）などのハーブ類も栽培された。

ビジターセンターの外観・内装には、ゲシュムの伝統的な様式を取り入れ、簡易宿泊施設には島の伝統的な採風・送風設備である Window catcher を採用した。これにより、島外・イラン本土からの観光客が、ゲシュム島の持つジオサイトなど自然資源に加え、ペルシャ地域の生薬植物資源やネガーブなどに代表される、地域の持つ伝統や風習など文化資源を理解し、愉しんでもらえる工夫を組み合わせていた。

ゲシュム島の伝統的な採風・送風設備である Wind catcher

自然環境保護により、経済活動が制限されてしまう地域住民の生計維持、それが担保される事による、積極的な保全活動を誘引する手段として、観光・文化的施策と絡めた生薬植物栽培による生計向上は定番では在るが、やはり効果があるものと感じさせる業務経験であった。